

「東日本大震災」災害支援だより

第3号 2011年6月15日発行

全国移動ネット災害支援の会 〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-1-2 山崎ビル 204号

◆問合せ先◆
全国移動ネット
TEL 03-3706-0626
E-Mail
info@zenkoku-ido.net

巻頭言

災害支援の会プロジェクト 代表・柿久保浩次

泥との格闘が続く被災地では5月も半ば過ぎると暑さも増して、大変な状況が続いているのだろう。被災地に豪雨とニュースが流れたが、こんな状況でも被災された方々は、一時避難の状態から普通の生活を取り戻すために、仮であっても新しい住まいや仕事を捜しているだろう。遠くで思いを巡らすだけでなく、現地に足を運ぶ人たちが我々の関係者にも増えてきた。しかし、まだまだこれからである。

●活動報告

1. 概要報告(2011年5月中旬～5月下旬)

●「被災地に赴き、次のステップを模索」(災害支援の会事務局)

5月は仙台の拠点を中心に全国移動ネットの関係者から、多くの方々に仙台・石巻・山元町を訪ねて頂いた。また石巻の移送レラが実施している被災者に対する無料の移動サービス提供活動に多数の方が運転協力してくれた。

被災直後の緊急避難状態から、次のステップをどうするのかを検討するために、国土交通省や日本財団などが、調査や意見交換の場を被災地で持ち始めた。全国移動ネット災害支援の会も初めて関係者で話す場を持った。

2. つづく被災地での活動と さまざまな想い

●5月16～20日「石巻・仙台で移動支援のボランティアをして」(移動ネットおかやま/横山和廣)

仙台の震災支援拠点で活動するために、岡山から2名で出向きました。帰岡は21日ですが、石巻市内は移動支援ボランティア・レラの活動に参加して、5日間約25回の運行となりました。車両は関西 STS チームが寄贈したセレナを使わせてもらい、スムーズに移動支援活動ができました。ありがとうございました。

仙台拠点では移動サービスネットワークみやぎ・菅原さんのご支援をいただきました。また、拠点の家主、ミキ自工の今野さん



支援拠点の寄せ書き作成をお手伝いしましたが、「寄せ書きが埋まること

生きがい」と話されていたのが印象的でした。

今回の運転者の年齢は62歳と67歳でしたが、移動支援ボランティア・レラの現場には、70歳代の方が3名もおり、車で寝起きしている方もいらっしゃるとのこと。大変な刺激を受けました。

そして今回の活動で、移動サービスの原点が見えた気がしました。

私たちは、今までいかに能天気なことを議論してきたのか？震災の現場は、タクシーも公共交通も道路運送法も機能しない世界です。そのような世界における移動支援の議論がされていなかったことを、改めて感じさせられました。

避難所の人には、いまだに石巻市から義捐金が配られていないそうです。着のみ着のままの避難者に、「石巻駅前のタクシーを使え」と簡単に言えるのでしょうか？

最後に、交代支援部隊の確保ですが、体験談を語りつけないでこれから試みたいと思っています。

●5月19日／石巻市「国土交通省、移送 NPO 関係者に被災者支援のヒアリング」

(移動サービスネットワークみやぎ／伊藤寿朗) ●●●●●●●●●●●●●●

5月19日、国土交通省自動車交通局旅客課などが石巻市を訪問し、被災された方々の移動ニーズについて、現場で活動中の団体・スタッフから話を聞きました(開催場所：伊藤家プレハブ(図書室))。

ヒアリングの目的は、「石巻地域で被災者を対象に移動サービスを実施している団体・スタッフの方々より、活動の現状と今後の活動計画を直接聞かせていただく」です。**開催の背景**は、①石巻市の被災者による移動サービスのニーズが多い。②北海道、横浜、東京、その他の地域から移動サービスの団体・個人が石巻に来て、ニーズに対応している。③震災以来2か月が経過し、緊急時の支援から日常の支援に移行する方策を検討する時期に来ている。④石巻地域では従来から移動サービスに対する関心は高くなく、福祉有償運送団体も「NPO：ぬくもり」1団体のみ…等です。

当日の出席者は、国土交通省自動車交通局2名、東北運輸局自動車交通部1名、北星学園大学客員教授 秋山哲男氏。NPOはホップ障害者地域生活支援センター2名、横浜移動サービス協議会、移動支援フォーラム1名、と私の8名でした。

◆NPO サイドから：①被災者から通院・通学支援の要望が寄せられているが、車両数、運転者数、緊急度等の制約で毎日の要望には応えられない。一日40件以上、多い時で70件の移動サービスを行っている。車両は5台前後運行しており、運転者は運転しながら食べ物を口に入れているケースが多い。(ホップ)②緊急性が低い要望もあるが、被災地の支援に来ているという意識から、「タクシーを利用してください」と言いにくい状況。今後、いつまで無料サービスを続けるか。タクシーの代わりにしな

いだという意識も出てくる？③現在の利用目的は通院が主。買い物への支援要望も数多いが、対応できないので原則断っている。④被災者の多くは現金収入がない。仮設住宅ができて、タクシーを利用できる環境にない人が多いのでは？⑤当地の人たちは、「自分たちでなんとかしよう」という意識が強く、利用を遠慮したり、病院帰りにタクシーを利用して帰宅するケースも多い。…など。

◆国土交通省から：①石巻市では誰が被災者の移動を考えているのか？②タクシーはどのような役割を果たしているのか？被災者に「タクシーを利用してほしい」と言える状況か？③NPOとタクシーの利用はどのように住み分けをしているのか？④各地から支援に来ているNPOの活動を、地元引き継ぐ必要があるのか？あるとすれば、引き受け手はいるのか？いない場合、福祉有償運送団体を作る動きはあるのか？…など。

◆今後の方針について：①通院、通学など日常的な移動サービスについては、行政が制度として支援する必要がある。②現在の無料バス(ミニバスなど)による避難所間移動や買い物バスなどのサービスが実施されている間は、NPOによる無料の移動サービスが必要。③無償で実施する移動サービスの期限を(たとえば)3か月以内に設定する必要があるのでは？④現在実施している移動サービスを地元引き継ぐことを考慮すると(緊急時である今)無償で利用できるケースと有償のケースを設定し、無償の範囲をできるだけ狭くすることも必要では？⑤現制度の福祉有償運送団体では引き受けることが難しい。財政的支援も必要となるので別の枠組みが必要ではないか？たとえば緊急雇用の制度で支援するなど可能性はある…という声が出ました。

2. 全国移動ネット災害支援の会・話し合い

●5月18日／世田谷区「だらだら話す災害支援の会」(ハンディキャブを走らせる会／鬼塚正徳) ●●●●

今回の震災に対して、移動サービスを軸に我々がどう支援を進めるのか？ いろいろなことがまだ見えない今は顔を合わせて“だらだら”話すことが必要と、柿久保さんから呼びかけられて8名((敬称略)柿久保、高松、菅原、杉本、山本(憲)、山野上、荻野、鬼塚)が、5月18日の午後、世田谷ボランティアセンターに集まった。

仙台市周辺、北茨城・福島、石巻市周辺などで、それぞれが被災地の方々の顔が見える範囲で体験し聞いたこと、感じたことを話し合った。

震災の直後の状態を見て、圧倒され立ちすくんだが、外部からの支援もあり、割れたガラスを片づけるようなことから始めたと、福島の様子も含めて高松さんが話してくれた。

また、仙台市内などは避難所の近くにお店があり、支援者も確保しやすいためか移動のニーズは顕著でないが、石巻や山村部は自家用車ありきの生活をしていたため、移動のニーズが多く、その中で石巻の移送レラの存在は

